信州読書会　YouTubeLive&ツイキャス読書会

課題図書　ヘミングウェイ 『移動祝祭日』

信州読書会では、毎週、YouTubeLive とツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
（募集要項はメルマガでお伝えします）
また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会　ツイキャス　http://twitcasting.tv/skypebookclub
YouTubeLive　https://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw
『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから　http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 https://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284
『ツイキャス読書会』 音声のバックナンバーです。
https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf
（各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。）

第 326 回の YouTube 読書会の課題図書は、ヘミングウェイの 『移動祝祭日』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

メルマガ読者　シュダイさん

『移動祝祭日』 読書感想文

60 代のヘミングウェイが 20 代の自分を振り返る本書。時は 1920 年代パリ。そこにはピカソやジョイス、フィッツジェラルドといった世紀を代表する才能が集まる。

（引用はじめ）
その種のリッチな連中は、低劣な嗜好を持っているわけでは決してなく、毎日を祝祭のように華やいだものにする
（引用おわり）

才能の周りには蜜蜂が花に群がるが如く多くの人集りができる。そしてひと通り蜜を吸い取った暁にはまた次の花を求めて移動する。蜂が蜜を求めて絶えず移動する様子はさながら移動祝祭日に形容することもできるだろう。

（引用はじめ）
私たちのセーヌと、私たちの街と、私たちの街の中の島とが。「あたしたち、幸運すぎて怖いみたい」妻は言った。
（引用おわり）

そんな華やかな世界に対して、セーヌ川を見て妻ハドリーが放つ言葉は美しい。
貧しくてもパリでの充実した日々に幸福を感じる彼女。しかし、若きヘミングウェイには 8 歳年上の妻ハドリーの真意は届かないのである。

（引用はじめ）
線路脇に立つ妻と再会したとき、彼女以外の女を愛する前に、いっそ死んでしまえばよかったと私は思った。
（引用おわり）

そう、彼は移動祝祭日に呑まれてしまい生涯最も愛した人であるハドリーを手放してしまうのだ。そして追憶の書である本書の言葉からはその後悔の念が伝わってくる。

（引用はじめ）
私は彼女を愛していた。彼女だけを愛していた。二人きりになると、素晴らしい、魔法のような時を彼女とすごした。
（引用おわり）

追憶という燃料を焚べ過去の恋を美しい物語に仕立てる。男とはなんとも勝手な生き物であろう。マッチョの代名詞ヘミングウェイが、センチメンタルに最初の妻ハドリーへの後悔を述べる本書だが、驚くべきは本書が死後出版物であり四番目の妻メアリーが編纂したということである。
メアリーがどういう気持ちで編纂したのかを推し量ることはできない。しかし、彼女のおかげで後世に生きる私達は文豪ヘミングウェイの内面に迫れると共に、最も華やかな時代のパリを克明に知ることができたのである。

（おわり）

※無断転載禁止

メルマガ読者　ぽぽさん

母と私のヘミングウェイ

子供の頃、母の大好きなヘミングウェイの映画を一緒に見た。
『誰がために鐘はなる』『武器よさらば』だったと記憶している。
戦争と恋の悲劇を描いたものだった。
母は主人公の男性に心奪われ、私は女優の美しさに憧れをいだいた。

『移動祝祭日』を読んで、若きヘミングウェイが、愛する妻ハドリーと、貧しいながらもパリの生活を楽しみ、友人と食事やお酒を飲み語らう場面は、子供の頃見た映画のシーンが甦り、重ね合わせて読んだ。

そして小説の中でも 「偽りの春」が一番心に残る章となった。
「たとえ偽りの春だろうと、春が訪れさえすれば楽しいことばかりだった」（新潮文庫 P.70）
私はこの冒頭の一文に心つかまれた。

ヘミングウェイが感じていた、偽り、そして満たされることのない空腹感とは何だったのだろう。
若きヘミングウェイは充実したパリでの執筆活動でありながら、何かが違うと感じ、足りないもの、新しいものを常に求め学んでいた。
例えば、自分の作品に奥行きを持たせるためにセザンヌの絵画からそれを学んでおり、そしてその手法はまだ秘密であると語っている。
そして意図的に作品のある部分を省略する、自分なりに編み出した理論は、まだ新しくすぐには世間に理解されないだろう、とも言っている
そこには何か新しい手法で、今までにない作品を生み出そうとする、若きヘミングウェイの気概が感じられる。

80 を過ぎた私の母は、ヘミングウェイは私の青春だったのよ。文章が素晴らしいの。
薄っぺらい言葉なんて使わないのよ、最上級の言葉を使うの。

と楽しそうに私に語った。

私は母にこの小説を送る事を約束をした。

時を経て、また母と一緒に同じ小説を語り合える事に幸せを感じ、この本に出会えた事に感謝している。

（おわり）

※無断転載禁止

メルマガ読者　さくらさん

『移動祝祭日』 感想文

いつかはフランスに行ってみたいなと思うけど、きっと行かない、行けないんだろうなぁと思うので、パリのカフェはどんな感じなんだろう？　と想像しながら読む事ができて楽しかったです。

昨日、宮澤さんが解説でカキのお話をされていて、私はなんとなく読み流してなんとも思わなかったのですが、よく考えると、めちゃ食べるやん！　って思いました。

それはまだヘミングウェイが若いからいつもお腹すかせていた為もあるかもしれないし、もともと食いしん坊なのかもしれないけど、食べ物の匂いから逃げている場面も面白いと思いました。

私も食いしん坊なので、少ない旅行経験のほとんどが食べ物目当てなので、共感できました。

今回はさらっと読んだだけなので、また読み返したら別の感想を持てるかもしれないし、じっくり読んで楽しむ作品なのかなと思いました。

良いなと思う文章もたくさんあったのですが、特に印象に残ったのは

（引用はじめ）

だいたい、秋は悲しいものと相場が決まっている。毎年、木の葉が落ち、裸の枝が風に打たれて冷たい冬の光に照らされるときは、自分の一部が死んだように感じられるものだ。それでもなんとか耐えられるのは、凍った川が再び流れるように必ずまた春が訪れるとわかっているからだ。（新潮文庫P.69）

（引用おわり）

最近は秋の時期が短くて 9 月、10 月も暑くて、こんな淋しい思いをするのは短い期間かもしれないけど、いつも思っていたのをこんなに的確に表現されているのは私の知る限りでは無いなと思うので、すごくいいなと思いました。

ヘミングウェイの作品はそんなに読んだことはないので、他の作品も読んでみたいと思いました。

（おわり）

メルマガ読者　おおい元気ぼっくすさん

ヘミングウェイのパリスケッチ

当時のパリの日常がイメージされる。スケッチ的というか、情景が容易に頭の中に映し出される。
センテンスが短く描写的であるため、まるで映画の脚本・台本を読んでいるようだ。
であるがゆえか、作品全体としてのストーリーをとらえるのは難しかった。
小見出し（章立て）ごとの展開。しかも登場人物や設定がほとんどリアルであるためか、
一見するとわかりにくい。それを補っているのが「注釈」。これまで読んできたどんな作品よりも
具体的であったと思うし、並行して読んでいくとさらにこの作品の醍醐味（充実したパリライフ）を
感じることができた。

当時のパリ。解説にもあるように「音楽、美術、文学、あらゆる面で、新しい芸術を指向する
エネルギーが沸騰していた」（新潮文庫 P307）。それが作品を読んでいてもよく理解できた。

特に興味深く感じたのは「カフェ」の存在。数々のヘミングウェイの作品作成にあたっての下地に
なっていたように思う。
作品を着想し書き進める「カフェ」。しかしカフェ文化発祥のパリ。人との交流の場でもある。
と同時に情報収集の場でもある。
「青い背表紙のノート、二本の鉛筆と鉛筆削り（ポケットナイフだと削りすぎてしまった）、
大理石張りのテーブル、早朝の匂い、床の掃き出しとモップでの清掃、それと幸運さえあれば、
あとは何も要らなかった」（P131）とはなんともキザではあるが、わかりやすくカッコイイ表現である。
そして執筆中に友人から声を掛けられると「幸運もここまで。こちらは仕方なくノートを閉じる」（P.132）と。
リズム感にあふれ、テンポよく、躍動感を感じる。そして、集中力が途切れた時の気持ちが伝わりやすい
印象的な場面である。
「はた迷惑な野郎だな、まったく」と瞬間的に怒りは感じても、そこから友人との語らいが始まる。

ヘミングウェイにとってパリは、思い出深い「移動祝祭日」であったということ。
カフェを筆頭に出会い、語らいにあふれた楽しい場であり、充実した生活空間であったということは
間違いないだろう。

（おわり）

※無断転載禁止

メルマガ読者　TOTO さん

『移動祝祭日』 ヘミングウェイ　 感想文

「移動祝祭日」
「教会歴中、年により期日の違う祝日のことをいう。復活祭もその一つである」（ブリタニカ）

今年は 4 月 9 日がイースターだった。毎年、祝祭日が違うのをつい最近知ったばかりだった。
今までにない題名で、何となくオシャレでヘミングウェイらしいなと思ったのだが、「タイトルは生前ヘミングウェイがホッチナーというライターに言ったセリフをもとにつけられている」とネット上にあり、本人が決めたものではなかった。

この作品はヘミングウェイが、亡くなる一年前に書かれた遺作であるという。

最晩年に思い出された二十代のパリの生活は、妻も含めて彼の脳裏に深く刻まれた最も印象的な情景だったのだろう。
四度の結婚の最初の妻、ハドリーが彼の心の中に深くあるのだと感じられた。そして 2 番目の妻との不倫が小説の最後に懺悔のように書かれてあった。

トイレもついていないアパート、毎日の生活費はギリギリ、ジャーナリストから作家へと過渡期にあった。
作品を生む苦しみを感じながらも、毎日が楽しそうで、「貧しい」というのは、「空腹」と同じくらい彼を作家にしていたのだ。

６１歳の彼がその若い時を描く。
晩年満たされない何か不幸な状況に置かれていたのかもしれないと感じてしまう。自死する一年前。

春の訪れ、真夏の海、晩秋、風、人の入らない雪面での滑走、彼の心に響く光景が、天気が、即、作品に反映された。
カフェで見つけた美しい女性まで、すでに自分のものとして作品になって行くのであった。

「自分を移植する」新潮文庫（p.16）

書くためには自分を別な場所に移し、その国の文化を楽しむ。そこでの感情の高揚がすごい圧力で伝わって来た。
毎日が祝祭日であるかのように、お金持ちにならない彼は自由であるように見えた。

パリのカフェ、場末のような店から有名な気持ち良く清潔な店まで、その雰囲気がとてもよくわかる。早朝から深夜まで、コーヒーだけではなくビール、ワイン、ウイスキー、オムレツや煮込み料理まであり、その美味しさは、彼の原動力であり、育ち盛りの子供のような表現から、味が忘れられない記憶として残っていたのだと思う。

そこで出会う作家や芸術家の会話が熱を帯びる。滞在時間は長くなる。

知らない有名な人物がこれでもかと登場した。夢のような交友関係がすごかった。

※無断転載禁止

その人物達の「注」を読んでいるうちに面白くなって、更にネットに発展してしまい、写真など見ていたら本文を読むのが極端に遅くなってしまった。文章を読んでいるよりそちらで時間を使ってしまった。

ガートルード・スタイン、パートナーのアリス・B・トクラス。
写真を見ると本当に農家の婦人のような大柄なミス・スタインと華奢なアリスがいた。
スタインは重鎮であるような面持ち。作家、詩人、美術収集家。他の芸術家からの信頼も高いのだが、ヘミングウェイは、相当に気を遣っていた様に読み取れた。
「壁にかけられない絵は描いてはだめ」とヘミングウェイの「北ミシガンで」という作品を酷評する。豊かな人間性を持っているのだが、頑固そうであり揺るぎない。後に別れが来るのだが手を焼きながらもヘミングウェイは多くを彼女から吸収したと思われた。

エズラ・パウンドという人もなんとなく惹かれた。写真を見たのだが、若い頃かなりハンサムであり優しい顔立ちであった。詩人で批評家、彼のスタジオには日本人画家の絵などもあり、出入りしていたという。

「彼はいつも他者のために良かれと尽くしていた」p.154 と、エズラのことは、ウォルシュという編集者もヘミングウェイと牡蠣を食べながら、「エズラは偉大な、実に偉大な詩人だね」p.177 と、彼の「高潔」を称えていた。エズラがパリを去るときに、ヘミングウェイに託した、コールドクリームの壜（阿片がはいっていた）が、果たしてダニング（アメリカの詩人、阿片中毒）にとって良いことであったかは疑問だったが、エズラの人に対しての尽くし方が何かを超えていたように思われて胸を打った。

そして「グレート・ギャツビー」の、
スコット・フィッツジェラルドがこの小説の後半を占めていて、まるで彼の小説のようだった。
偉大に見えた彼も、病や妻ゼルダとの関係に悩む真面目な人間であり、夫婦共にお酒が災していたのだった。
スコットの悩みをくみとれなかったヘミングウェイの深い後悔が晩年の彼の脳裏にあったのだと思われた。

登場した作家、芸術家の多くはとても早くに亡くなっていた。

ジュール・パスキン。ブリガリア生まれ、後にアメリカ国籍を取得した画家、「モンパルナスのプリンス」と呼ばれた彼にも作品中悲しい憂いを感じたのだ。個展が開かれる前日に 40 代で自死していた。

274 ページに出できた「フォン・ブリクセン男爵の妻が、カレン・フォン・プリクセン＝フィネッケというデンマーク生まれの貴族で、後に「イサーク・ディーネセンというペンネームで「アフリカの日々」、映画化された、メリルストリーブ主演の「愛と哀しみの果て」という作品になり、「バベットの晩餐会」も彼女の作品であることを初めて知った。

ページをめくる度に出てくる多くの著名人に「注」を見ながらなかなか追いつけなかったが、一人一人のの生涯があまりに劇的だったのでとても刺激的だった。

しかし、私は「キリマンジャロの雪」の文章の方が好きだった。

（おわり）

※無断転載禁止

メルマガ読者　玉井さん

『VTuber のマイクに転身したら、推しが借金まみれのクズだった』

っていうタイトルのライトノベルをさっき読んだ。

で、課題図書『移動祝祭日』には、弱冠二十二歳の著者がパリに移住してから妻と離婚するまでの約七年間に起きた出来事が回想録として断片的に描かれている。その多くは、未来のノーベル賞作家ヘミングウェイの文学修行の様子であり、その際の苦労話だけでなく「創作上の注意点」もいくつか見受けられる。

▼創作上の注意点①　～　ミス・スタインからの教訓　～
「ミス・スタインの教え」の章において、スタインは著者の短編に対して次の様な評価をくだす。

<<展示会の壁にかけられない作品のようなもの>>　であり、そういった作品は　<<まったく無意味なことだから。それは間違っているし、愚かしいことなんだったら」>>新潮文庫,P.28-P.29

【解説】スタインの根拠が弱いので分かりにくいが、上記はおそらく「多くの読者を想定した作品を書くべし」「露骨な表現は避けるべし」といったところか。私が思うに、ヘミングウェイの小説は露骨な表記がまあまあるので、こうしたスタインの教訓はあまり加味されてない様に思われるが、過去の読書会で扱われた『キリマンジャロの雪』のラストシーンの様に劇的な展開は多少あったりするので、そういった点は教訓が生かされているのかもしれない。

▼創作上の注意点②　～　エズラ・パウンドからの教訓　～
「リラでのエヴァン・シップマン」の章では、著者が信頼を置くエズラ・パウンドから次の様な教えを受けたという。

<<“正確な言葉(モ・ジュスト)”　――対象を正しく形容する唯一の言葉――の信奉者であり、私がのちに、ある状況下ではある特定の人々を信頼しなくなったように、形容詞を信頼するなかれ、と私に教えた人物なのだ。>>同著,P.186

【解説】上記も経緯不明だが「形容詞を信頼するなかれ」という点からして「何かを表現する際に用いる言葉は慎重に吟味するべし」「率直に語るべし」といったところであろう。ヘミングウェイの小説は読みやすい作品が多く、それは言葉に迷いが無いからともいえる。つまり、ウダウダ書かないのはこうしたエズラの教訓が生かされているからなのかもしれない。

といったことを考えながら、こうしたヘミングウェイの修業時代からおよそ百年が経とうとする今、あらためて『VTuber のマイクに転身したら、推しが借金まみれのクズだった』(※2022　年発表)を読み返してみると、私の頭脳ではなにがなんだかもう訳が分からなくってしまったので、今一度冷静になるために私も、ライトノベル『美少女アイドル系　VTuber　のカメラに転身したら、推しが童貞クソニートのおっさんだった』を執筆することに決めた。

以上

（おわり）

信州読書会　主宰　宮澤さん

「ヘミングウェイは、太宰治に似ている」

素敵な回想録だと思いながら読んだものの、ヘミングウェイは、厄介な人だと思った。

ガートルード・スタインと疎遠になった理由が P.170 に書いてある。どういう状況なのか知らないが、スタインのごく私的な会話がたまたま耳に入ってしまい、いたたまれなくなって疎遠になったという。

（引用はじめ）

だが、身内の人間となると、たとえ彼らに対して見ざる聞かざるの態度を貫き、彼らの送ってよこす手紙を無視したとしても、手ひどいしっぺ返しをいろいろ覚悟しなければならない。
（P.155～156）

（引用おわり）

ヘミングウェイも、この『移動祝祭日』のあらゆるところで、昔の友人にしっぺ返しをしている。スタインと疎遠になった理由を、わざわざスキャンダラスな匂わせを交えて書くのも、婉曲的なしっぺ返しのように、私には思える。

ヘミングウェイのマチズモには、私はちょっとついていけないところがある。健啖家で、命知らずで、なおかつ女性に甘えずにはいられない、そんな男らしさが、力みかえっているようで、読んでる方も、力が入ってしまう。

エヴァン・シップマンのことを好いているのは、『リラのエヴァン・シップマン』（P.184）でよくわかった。貧しくても感傷的ではなく、心置きなく文学談義ができて、でも、適度に情に厚くて、ユーモアセンスもあって、パリでの生活に分相応に溶け込んでいる 20 歳の若者である。肩肘張った 25 のヘミングウェイがパイセン風を吹かせて、付き合える若者だったのだろう。エヴァンが私生活でも親しくしているリラのウェイターを持ち出して、フィッツジェラルドのフランス人ウェイターへの偏見への面当てにするシーン（P.236）を読むと、同じ作家としてのフィッツジェラルドの無神経を批判しているようにみえる。
スコット・フィッツジェラルドはもちろん、パリでの友人は、皆、心許せることのない潜在的なライバルだった。

ヘミングウェイは、スコット・フィッツジェラルドの彼女であるゼルダに「タフガイ気どり」といって嫌われていたそうだが、この平凡な批判は的を射ていると思う。

彼が後年のエッセイの中で、友人ににしっぺ返しをするところは、わりかし、日本の私小説家に似た、陰気な振る舞いだと思った。とりわけ、フィッツジェラドのイチモツの話など、嫌味だった。交友関係を創作の材料にして、なおかつ自分が演じたキャラに飲み込まれていった点では、ヘミングウェイは太宰治に近い作家だと思う。
志賀直哉のほうがヘミングウェイなんかよりも、よほどタフガイだし、友情に厚い。

パリの文学的青春時代を華やかに回想した作品でありながら、ヘミングウェイの隠しおおせていると思っているひ弱さが、ところどころに漏れ出していて、少し、痛々しい気がした。

（おわり）

※無断転載禁止

フィッツジェラルド

ゼルダ

エズラ・パウンド

ガートルード・スタイン

エヴァン・シップ

ウィンダム・ルイス

シルヴィア・ビーチ

フォード・マドックス・フォード

ヘミングウェイとハドリーとバンビ↑

ヘミングウェイとポーリーン　→